



Title	在日コリアン1世の接触変異音の生起と定着過程について：異なる社会的属性を有する1世を事例として
Author(s)	金, 美善
Citation	阪大日本語研究. 2001, 13, p. 53-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4026
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

在日コリアン1世の接触変異音の生起と定着過程について —異なる社会的属性を有する1世を事例として—

The pidginization process of phonological interference
as a language contact : The case of ZAINICHI Korean ISSEI
affected by different social backgrounds

金 美善
KIM Miseon

キーワード：言語接触 音韻干渉 過少弁別 ピジン化 脱ピジン化

【要旨】

日本最大の在日コリアン密集地域として知られる大阪市生野周辺に生活する多くの1世には、日本語の音素〔ts〕と〔s〕を音韻論的に区別しない現象が見られる。

本稿では、1世の自然談話に見られる〔ts〕／〔s〕の現れを話者の属性や社会的環境との相関に注目して考察した。結果、1世の過少弁別の生起と定着には、話者の習得の形態より、日本語母語話者との接触の程度や同母語話者で構成されるコミュニティの有無といった社会的環境が大きな要因であることを明らかにした。

1. はじめに

近来、日本の社会言語学の研究では、異なった言語体系・言語形式の接触による新形式の現れなど興味深い現象が報告されている¹⁾。接触の生起要因は、マスメディアの発達・教育の普及・移動の多様化などさまざまであるが、言語接触の視野をマクロレベルに広げると、異言語間の接触による新形式存在の可能性が見えてくる。

日本には、戦前・戦後にさまざまな理由で来日し、そのまま定住するようになった在日コリアンが多数生活している。特に、大阪市生野周辺は在日コリアンが全人口の4分の1を占める在日コリアンの密集地域として、長年異言語接触地域を形成してきた。生野周辺に生活する在日コリアンのうち、とりわけ祖国で言語形成期を過ごした1世の日本語の運用には、彼らの母語や生活様式に影響された様々な新形式が観察される。

金(1998a,b)では、生野周辺に生活する在日コリアン1世の日本語には、音声・語法・語彙・運用全般にかけて、彼ら独自の変種というべきものが見られるとし、その変種の生起要因を、1世の来日と定着、密集をなした歴史的背景と地域的特殊性、さらに、日本語

の習得を取り巻く社会的環境など、様々な要因が絡み合っていると指摘した。

本稿は、常に日韓両言語の接触状態で生活する在日コリアン1世の変異音についてその生起と定着の過程を、話者が属する社会的背景と関連付け考察を試みたものである。

2. 問題のありか

2. 1. 生野周辺1世の/cu [tsu] /音

大阪市生野周辺に居住する、在日コリアン1世の日本語では、かなり安定して以下のよう
に破擦音 [tsu] と発音されるべき音素/cu/が摩擦音 [su] となり、[tsu] と [su]
を音韻論的²⁾ に区別しない現象が見られる。

(1) ウチノダンナワ イマ スリ [suri] ニイッテルネ。

(うちの旦那は今、釣りに行っているね)

例えば、生野周辺では、「鶴橋」の発音が「スルハシ [suruhafi]」でも「ツルハシ [tsuruhafi]」でも使用者・理解者の間では同一の意味をもつ。したがって、(1) のように異なる意味をもつ語が同一音素として現われる場合は、文脈で意味を把握することになる。

この両音節の過少弁別が1世の定着当時からかなり一般的な傾向であったことは、以下の情報からもうかがえる。

(2) 「ハラミみっす、バラふたっす、上ミノふたっす、センマイひとっす、生キモひとっす」
と注文した。

※下線筆者 『猪飼野物語－濟州島からきた女たち－』元秀一著 草風館 p.27

上の引用文(2)は、生野区出身在日コリアン2世の、生野周辺(旧猪飼野)を舞台に1世の来日と定着を描いた文学作品のなかに登場する1世の談話中の/cu/の発音である。

このことから、1世とは母語が異なる2世が、1世の [tsu] の発音を [su] ととらえていることが分かる。下線部の [su] を促音の後に表記しているが、著者が使用している促音に後続する [su] は、韓国語の濃音 [s']³⁾ に相当する音価で、著者の聴覚印象の正確さが表記に現れたものであると判断できる。

2. 2. 韓国に残存する日本語借用語彙の [tsu] 音

同様の類似した現象は、植民地支配の時期に韓国に流入し現在に至るまで残存する [tsu] を含む日本語借用語彙からも観察できる⁴⁾。

(3) つめきり (爪きり) : 쓰메끼리 [s'umek'ri]

(4) バケツ : 바케쓰 [pakes'u]

(5) 豚カツ : 돈까스 [tonk'asu]

2. 3. 他地域居住話者の場合

一方、孫 (1998) は、新潟県在住の1世⁵⁾を対象とした日本語運用における音声上の干渉に現われる特徴のうち、[tsu] の発音を取り上げ、金 (1997) の報告した生野周辺の1世の過小弁別現象は見られず正確に発音していると報告している。

(3) [tsubame] (つばめ)

(4) [azitsuiteruno] 買えばちょうさもねえのに

(味がついているのを買えば造作もないのに)

孫香織 (1998) p. 4

2. 4. 理論的背景

2. 4. 1. 言語接触と音声干渉

音声干渉は、2言語併用話者の個人内部における言語接触の結果として現れる (Weinreich 1953, Odlin 1989)。Weinreich (前掲書) は、この問題を音の知覚と再生に関わる問題としてとらえ、2言語併用話者が L2 の音体系の1音素を L1 の体系の1音素と同一視 (identification) し、それを再生する際に L1 の音声規則に適応させることによって生起するとしている。音素体系における同一視は、L2 習得負担の軽減になるとされる。

本稿で取り上げる現象は、日本語の音素 /cu [tsu] / に対応する韓国語の音素がないため母語の音素 /su [su] / を代用したもの、つまり、第二言語の音声習得における母語の音韻体系の干渉による音代用 (sound substitution) であると解釈できる。従って、習得の順として [su] が無標、[tsu] が有標であるため、[tsu] が [su] に代用されることはあっても、[su] が [tsu] に代用されることはない。なお、これらの現象は、第2言語習得の際に一般的に現われる惰性 (inertia) であるという解釈も可能である。発音のしやすさや経済性—ここでは、有標二重調音の回避—を求めた結果として現れた音韻

の単純化 (simplification) が L2 体系への過小弁別 (underdifferentiation) をもたらす要因となったとする見方である。なお、韓国語に残存する借用語彙についても同様の背景で説明できる。

2. 4. 2. ピジン化と自然習得

生野周辺 1 世の日本語の習得過程は、ピジン化の過程と類似している面を見せている。

Selinker (1972) は、自然習得で第 2 言語を習得する初期の段階で発達が膠着化する現象を化石化 (fossilization) とし、その要因を発達過程、目標言語の不完全な知識、母語の転移としている。Schumann (1978) は、化石化現象をピジン化 (pidginization) の過程ととらえ、自然習得で第 2 言語を習得中の話者が目標言語に到達できず化石化していく要因を社会的・心理的なものに帰結している。

生野周辺に居住する 1 世のほとんどは、正式な機関で日本語を学習した経験がなくもっぱら聴覚的情報によって日本語の音声習得しており、定着初期からすでにコミュニティが形成され、音声習得のモデルも同母語話者である先着者が中心となるきわめて特殊な環境で生活している⁶⁾。このような、集団における言語接触状態と干渉形態の安定について、Thomason & Kaufman (1988) は、言語接触の結果における言語変化は、初期の L1 (substratum) の干渉形態が、集団の不完全な習得 (imperfect group learning) によって模倣され周囲に伝播する過程にあると説明している。

同母語話者による大きなコミュニティが形成されている生野周辺の場合、第 2 言語習得の初期段階で発生した母語の干渉による音代用が目標言語に到達できず、集団内部で定着したことになる。生野周辺 1 世の干渉形態の定着 (ピジン化) に関わるコミュニティの形成過程と日本語の習得状態は以下のように整理できる。

- ・ 母語を同じくする話者の、集団をなす移動
- ・ 同じ地域での密集
- ・ 母語を同じくする話者によるコミュニティの形成
- ・ 日本語の自然習得
- ・ 日本語母語話者との接触の欠如
- ・ 地域内での変異音の通用性

一方、§ 2. 2. で述べた他地域に居住する 1 世の場合、生野周辺 1 世と同様、自然な環境で日本語を習得したことになるが、対象となる音を正確に習得しており、生野周辺 1

世とは異なる結果を見せている。従来の理論的仮説ではこれらの結果を説明することができない。筆者は、このことについて、話者が属するコミュニティの内容と模倣の原理を解釈の観点に入れた。§ 2. 2. の他地域居住1世は、生野周辺と異なる日本語主流コミュニティに生活している。日本語母語話者との接触が中心になる社会的環境に生活し、日本語母語話者の音韻形態を模倣する過程で対象音韻を正確に習得したことになったと考えているのである。この解釈は、Thomason & Kaufman（前掲書）がすでに言及した集団内部での模倣の原理を、不完全な習得集団のみならず母語話者集団へと適用の範囲を拡大したものにもなる。

整理すると、生野周辺1世と他地域居住1世の対象音韻の習得過程は、初期の習得状態（自然習得）は同一であるが、一方はピジン化に進み、一方はネーティブ化（nativization）に進んだ結果となり、おかれた環境（コミュニティの内容）による社会的要因が大きく関わっていると推測できる。従って、従来の自然習得とピジン化との相関は再考しなければならないことになる。

以下は、上記の問題意識を検証するため、まず、対象音変異の実態や安定度をはかり、さらにその実態を社会的変数との相関から、社会的変数が及ぼす変異音への影響を推論していくことにしたい。

3. 資料と分析方法

3. 1. 資料の性質

本稿で用いるすべての資料は、調査者が加わったインタビュー場面での1世の談話を録音したものである。資料の性質は以下になる。

話 題：祖国での生活、来日と日本への定着の過程、日本語の習得状況

録音量：一人当たり60分～90分（発話量はそれぞれ異なる）

収録時：1994年から1998年

収録場所：インフォーマント宅

3. 2. 分析方法

分析には、日本語の発話に現れた／cu／音を含む語の数を単位として数え、変異音の使用状況を判断する⁷⁾。変異音を語として数えるのは、自然習得の場合、個々の音に注目して習得が進むというより単語ごとにひとつかたまりとして習得が行なわれた可能性が高い

ためである。

なお、本稿では、談話の中で、／cu／音を含む語が〔tsu〕として実現された変異音を「標準変異音」とし、〔su〕として実現された変異音を「接触変異音」とよぶことにする。

まず、生野周辺1世の変異音の使用実態を把握するため、前述した生野周辺1世が共有する社会的環境をまとめ、以下のような社会的変数を設ける。また、社会的要因と変異音の選択の相関をみるため、異なる社会的属性を有する1世の自然談話資料を検証資料として加える。考察の都合上、いくつかのグループ分けを行い論を進めることにする。

1. 教室場面での日本語学習経験がない
2. 定着時、日本語を主に職場や先着者との接触によって習得している
3. 識字能力がない
4. 来日の最初の段階から生野周辺に定着し、他の地域での居住経験がない
5. 普段の接触相手が同母語話者中心である

上記の内容に全て当てはまる話者を典型的な生野周辺1世とし、第1グループとする。また、第1グループと対比させるものとして、生野周辺に居住し、第1グループに設けた社会的変数のいずれかを異にする1世を第2グループとして設定する。

- 1'. 教室場面で日本語を習得した経験がある
- 2'. 定着時、日本語を主に日本語母語話者との接触によって習得している
- 3'. 識字能力がある
- 4'. 日本での他地域での居住経験がある
- 5'. 普段の接触相手が日本語母語話者中心である

さらに、生野周辺に居住経験がなく、日本語主流社会に生活する1世も比較の対象にする。ただし、属するコミュニティの内容だけを考慮するため、正式に日本語を学習した経験がない1世を対象とする。以上の属性を有する話者を第3グループ⁸⁾とする。

第4グループとして、日本語との接触がある時期を基点として断絶し、もっとも日本語との接触が限られている1世と同年代の韓国に居住する話者の対象音韻情報についてもとりあげる。この場合も、属するコミュニティの内容だけを考慮に入れ、日本語の正式な学習経験がある話者を対象とする。

3. 3. インフォーマントの属性

表1から表4は、各グループのインフォーマントの属性である。

表1 第1グループの属性

話者	性	生年	来日年	出身地	居住地	定着地	日本語教育	識字能力	他地域居住歴	配偶者	職歴
YS	女	1917	1943	済州島	生野	生野	なし	なし	なし	1世	工員、内職
SA	男	1925	1946	済州島	生野	生野	なし	なし	なし	1世	工員、内職

表2 第2グループの属性

話者	性	生年	来日年	出身地	居住地	定着地	日本語教育	識字能力	他地域居住歴	配偶者	職歴
BJ	男	1914	1932	全羅道	生野	生野	高校	あり	なし	1世	教師、運転
CH	男	1926	1944	全羅道	生野	広島	小学校	あり	広島 山口 佐賀	1世	単純労働
JY	女	1920	1936	済州島	生野	生野	*夜中	あり	なし	1世	工員、内職
KT	女	1916	1929	済州島	生野	生野	なし	あり	なし	1世	工員、内職
TI	女	1917	1938	済州島	生野	生野	なし	あり	なし	1世	工員、内職
HR	男	1922	1938	済州島	生野	生野	なし	なし	なし	2世	印刷職人 単純労働
SM	女	1938	1966	済州島	生野	東京	なし	なし	東京	2世	店員、内職

*夜間中学

表3 第3グループの属性

話者	性	生年	来日年	出身地	居住地	定着地	日本語教育	識字能力	生野居住歴	配偶者	職歴
A	男	1906	1924	慶尚道	青森	下関 東京	なし	あり	なし	1世	行商
H	女	1920	1946	慶尚道	姫路	姫路	なし	なし	なし	1世	農業

表4 第4グループの属性

話者	性	生年	出身地	居住地	日本語教育	識字能力	来日経験	職歴
P	男	1927	済州島	済州島	小学4年	あり	観光	農業
O	女	1929	済州島	済州島	小学校	あり	観光	農業

4. 結果

まず、全員の自然談話に実現した／cu／を含む語を延べ語数、異なり語数別に、実際現れた音声として数値的に整理すると、接触変異音の使用が安定しているグループ、標準変異音の使用が安定しているグループ、両変異音を併用しているグループといったグループ別の変異音の使用分布状況が見出される。

4. 1. 接触変異音の使用が安定しているグループ

4グループのうち、もっとも接触変異音の使用が安定しているのは、典型的な生野周辺1世である第1グループ2人と、韓国居住話者である第4グループ2人の計4人である。

まず、第1グループの場合、両者とも殆どの語に接触変異音を用いて

表5 第1・第4グループの使用状況

	実数 (%)			
	YS	SA	P	O
延／異	64／21	79／37	27／11	8／6
ts	3 (4.7)	5 (6.3)	1 (3.7)	0 (0)
s	61 (95.3)	74 (93.7)	26 (96.3)	8 (100)
合計	64 (100)	79 (100)	27 (100)	8 (100)

延 (延べ語数) 異 (異なり語数)

おり、標準変異音の使用はまれである。現われた接触変異音の音声内容を細かく分けると、韓国語の声門閉鎖を伴う摩擦音 (濃音) [s'] の使用もみられるが、本稿では音韻論的解釈をとり、また、日本語では、[s'] と [s] は異なる音環境によって実現する条件異音として同一音素に属するものであるため、本稿では両変異音を区別せず、／s／として処理する。

両者のデータから、まず、典型的な生野周辺1世の日本語に接触変異音の使用がかなり安定していることが確認できる。まれに見られる標準変異音は、YSが、「あいつ」(延べ1)、「いつも」(延べ2)、「やつ」(延べ1)の3つの語に、SAが、「せいかつ (生活)」(延べ5)、「やつ」(延べ8)、「にがっ (二月)」(延べ4)、「たつみ (巽)」(延べ1)、「もっ (持つ)」(延べ1)といった語に実現されている。このうち、延べ数が重複する場合、両変異音が混在し、自由変異的に現れる。なお、延べ数が重複している語に標準変異音のみの実現は両者とも一例も見られない。

韓国に居住する話者 (第4グループ) の場合も標準変異音の使用がほとんど見られず、第1グループとほぼ同様の結果が見られる。

Pの場合、「しつもん (質問)」(延べ1)にのみ標準変異音の使用が見られたが、これは調査者の発話「日本語で質問してもよろしいでしょうか」に引きずられたものであると談話の流れから判断される。Oの場合も、数は少ないものの、すべて接触変異音を用いて

いる。この結果から、1世と同年代の韓国の老年層の日本語の談話に現れる／cu／音も[sw]に代用されていることが明らかであり、これら両グループの場合、もっともピジン化が進んだ段階とみて差し支えがないと思われる。

4. 2. 標準変異音の使用が安定しているグループ

第1グループと韓国で居住する同年代の話者とは異なり、標準変異音の使用が安定しているのは、第1グループと同様の社会的属性を有し、生野に居住経験がない他居住地域の1世（第3グループ）である。使用状況は以下のとおりである。

まず、青森に居住するAの場合、ほとんどが標準変異音を用いており、第1グループのような接触変異音の使用は談話全体で1例も見られない。興味深いのは、生野居住1世とは異なる干渉形態を用いることである。その内容は、口蓋破擦音[tʃu]による代用であり、「つぼ（坪）」（延べ5）1つの語に延べ3回は口蓋破擦音[tʃu]を代用し、残り2回は標準変異音を用い両変異音が自由変異的に現れている。日本語の／cu／音を口蓋破擦音[tʃu]をもって

表6 第3グループの使用状況
実数（％）

	A	H
延／異	58／34	39／33
ts	55 (94.8)	33 (84.6)
s	0 (0.0)	6 (15.4)
tʃ	3 (5.2)	
合計	58 (100)	39 (100)

延（延べ語数） 異（異なり語数）

代用することは、韓国語母語話者に一般的に見られる現象であるとされるが（梅田1985）⁹⁾、なぜ、同年代にこのような音代用の差が生じたのかはいまのところは解釈ができない。一方、姫路に居住するHの場合、青森の1世と同様の標準変異音の使用率を見せられているが、青森の1世とは異なる接触変異音を代用していることがわかる。接触変異音が現われる語と出現回数は、「けつあつ（血圧）」（延べ2）の2回、「べつ（別）」（延べ4）の3回、「ちょっとずつ」（延べ1）の1回の、3つの語に計6回である。

両地域に居住する1世の場合、かなり安定して標準変異音の使用が見られるが、これは、両者とも日本語主流社会に生活し、日本語母語話者との接触によって標準変異音を習得した結果であると判断できる。つまり、両者の場合、ネーティブ化が進んだ結果と解釈できるが、姫路の1世の用いる接触変異音の使用については、使用語彙全体において青森1世ほどネーティブ化が進んでいない段階であるといえる。

4. 3. 両変異音を併用しているグループ

第2グループは、上記の3つのグループと異なり、個人の体系の中に両変異音が混在している。また、話者によって接触変異音と標準変異音の比率が異なる分布を見せている。

接触変異音の使用率の順に話者を整理すると以下ようになる。

表5 第2グループの使用状況

	実数 (%)						
	KT	TI	SM	BJ	CH	JY	HR
延／異	58／20	37／13	71／36	111／55	63／26	38／19	42／21
ts	16 (27.6)	16 (43.2)	36 (50.7)	79 (71.2)	47 (74.6)	31 (81.6)	36 (85.7)
s	42 (72.4)	21 (56.8)	35 (49.3)	32 (28.8)	16 (25.4)	7 (18.4)	6 (14.3)
合計	58 (100)	37 (100)	71 (100)	111 (100)	63 (100)	38 (100)	42 (100)

延(延べ語数) 異(異なり語数)

全体的に、同じ生野周辺に生活する第1グループより接触変異音の使用が高い比率を見ていることが分かるが、これは、ピジン化の過程でなんらかの社会的要因によって脱ピジン化が進んでいる段階とみてよいだろう。

話者によって変異音の分布の比率が異なるのは、それぞれの社会的変数が脱ピジン化の要因として作用したものと解釈できる。これは異なる社会的背景が脱ピジン化に影響しているとみていいだろう。脱ピジン化に関わる具体的社会的背景については次節で詳しく検討したい。なお、話者それぞれの具体的な語彙別両変異音の使用率については、付録を参照されたい。

5. 考察

ここでは、話者全員の社会的変数と変異音の使用を相関させ、ピジン化とネーティブ化に関わる社会的要因を考察し、個別的属性とコミュニティの影響について検討を行うことにする。

図1は被調査者全員の両変異音の使用率を地域別にまとめたものであり、表8は話者それぞれの習得に関わる社会的変数を整理したものである。(+)はネーティブ化を促す要因であり、(−)はピジン化を促す要因である。

5. 1. 自然習得とコミュニティの影響

第2言語習得における化石化、ピジン化のプロセスに言及する際、従来は、話者の属性として自然習得及び不完全な習得を前提としてきた。しかし、本稿で用いたデータには従来の仮説及び理論が適用できない。まず、韓国に居住するP、O(第4グループ)の場合、韓国で日本語の学習経験を持つ。しかし、標準変異音の習得には到達できず干渉による代用音(接触変異音)を使用している反面、他地域居住話者(第3グループ)の場合、自然習得の状態で標準変異音の習得がほぼ完成している。化石化とピジン化の要因として

図1 変異音の使用率

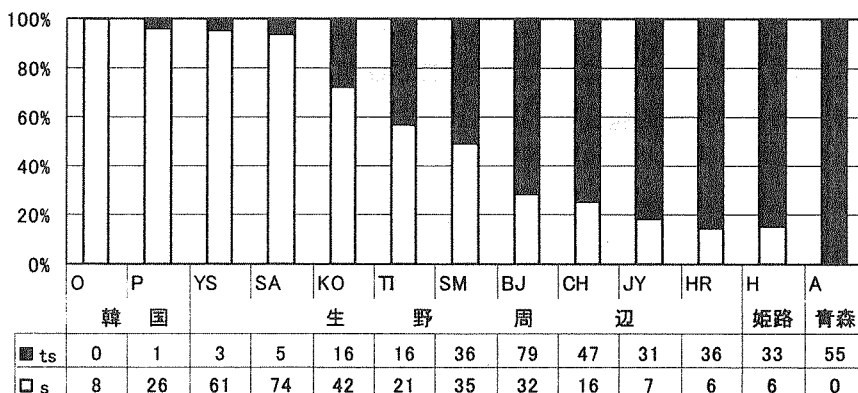


表8 習得に関わる社会的変数

	O	P	YS	SA	KO	TI	SM	BJ	CH	JY	HR	H	A
学習経験	+	+	-	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-
識字能力	+	+	-	-	+	+	-	+	+	+	-	-	+
日本語母語話者によって習得	-	-	-	-	-	-	+	+	+	-	+	+	+
日本語母語話者との接触	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+
他地域居住経験	/	/	-	-	-	-	+	-	+	-	-	+	+

/: 日本居住経験なし

自然習得及び不完全な習得が絶対的ではないことが本稿でのデータで判明したのである。両者の結果からは化石化、ピジン化に関わる第1変数は、自然習得、不完全な習得よりは、話者の属するコミュニティの内容で決まることが見出される。学習によって意識的調整が可能であってもそれが保持できる環境が維持できない限り、ネーティブ化の達成は難しいということである。言い換えると、自然習得、不完全な習得の場合でも、話者の属する社会的環境、母語話者との接触の程度によってネーティブ化は進むことになる。図1と表8で示された、他地域居住話者と韓国居住話者の社会的変数の内容及び実際に現れた両変異音の使用率がそれを示す好例となる。韓国に居住する話者の場合、学習経験があっても日本語との接触の欠如によって、ネーティブ化には至らず、ピジン化に移行したことになる。一方、他地域に居住する1世の場合、自然習得であっても日本語母語話者との日常的接触によってネーティブ化に移行したことになる。

5. 2. ピジン化と脱ピジン化に関わる社会的要因

生野周辺に居住する1世のうち、生野周辺の典型的な属性を有するYS、SAの接触変

異音の使用率は、ピジン化がすでに安定している現れであるとすでに述べた。第2グループの結果は、ピジン化の段階で脱ピジン化が進んでいることを示すものであることもすでに述べたとおりである。ここでは、話者全員の使用率と社会的変数との相関から、脱ピジン化に関わる社会的要因を推論してみたい。

HR：配偶者が日本語母語話者（2世）である

日常生活で日本語母語話者と接している

JY：夜間学校で10年間日本語を習った

CH：国で小学校を卒業し、そこで日本語を習った

生野周辺に定着する前に23年間他地域で過ごした

BJ：国で中学校を卒業し、さらに日本でも二年間高校に通った

SM：最初の来日地点が東京であった

配偶者が日本語母語話者（2世）であった

TI：日本語の識字能力がある

KT：日本語の識字能力がある

上に整理した結果をもとに考えると、話者の標準変異音の使用頻度には、家庭内や日常生活における日本語母語話者、つまり標準変異音使用者との接触の量が第1変数となるようである。標準変異音との接触度と両変異音の使用率は、第3グループ（他地域居住1世）の変異音の分布からも確認できた結果である。HRは来日当時から印刷屋の職人、単純労働など、他の1世とは異なる職歴をもつ。また、配偶者が日本語母語話者（2世）であり常に日本語と接する生活をしている。

次に標準変異音の使用頻度を決める変数と考えられるのは、正式な機関での学習経験である。学校での学習経験があるJY、CH、BJの順に標準変異音の使用頻度は高くなる。JYは、以前、正式な機関での学習の経験がなく、60歳を過ぎて夜間学校に通い始め、10年間日本語を学習したという学習歴をもつ。夜間学校では日本人の先生に読み書きを中心に日本語を習ったと内省している。一方、CH、BJの場合、来日前に韓国で日本語を学習した経験がある。しかし、CH、BJの学習歴を比べると、BJの方が学校教育を受けた期間がながく、韓国で日本語の講師を務めた経歴をもつなど、BJの方が標準変異音の使用率がより上位にランクされることが予想されるが、結果は、CHの方が標準変異音の使用率が高い。これは、日本語母語話者との接触が標準変異音の使用率を高めた第1変数であることを考えると、CHの他地域での居住経験が標準変異音の使用率を高めた要因とし

て作用したものと判断できる。CH は、生野に居住する前に、他所で 23 年間の居住経験がある。表 2 で示したように、最初の来日場所である広島県を始め、山口県、滋賀県と居住地域を転々としながら単純労働の仕事をしていた経歴を持つ。他所では主に日本語母語話者と接触したと内省しており、その影響が正式な教育をうけた話者の標準変異音の使用率を上回る結果となったと考えられる。一方、BJ は来日当時からずっと生野周辺に生活している。

標準変異音の使用順位で次に現われるのが、標準変異音と接触変異音の使用率が拮抗している SM である。SM は、最初に来日した地点が東京（2 年間）であり、配偶者が日本語母語話者（2 世）であったことが第 1 グループと異なる社会的属性である。東京では親戚の家で生活しており、店員の仕事をしていたと内省している。SM の場合、HR と同様の属性つまり、配偶者が日本語母語話者であることが一致するが、配偶者との生活は 7 年と HR より短く、標準変異音との接触の量が HR とは異なる。この接触の期間と長さが HR と異なる結果に影響したものと判断できる。

第 2 グループのなかで標準変異音の使用率が他の 1 世より低い数値を見せているのは TI と KT である。この 2 人は、他の属性は全て第 1 グループと同様であるが、2 人とも読み書き能力があることが、第 1 グループとの相違である。2 人とも、文字は自力で習得したと内省している。

5. 3. 再ピジン化

日本語を受けた経験のある話者である第 2 グループのうち、JY、CH、BJ の属性を綿密に観察すると、それぞれ 10 年、6 年、11 年の日本語学習経験をもつ。三者は一見、脱ピジン化が進行していると解釈しうるかのようであるが、3 人の両変異音の使用状況を同様の過程として結論付けるには無理が生じる。CH の場合、他の話者に比べ、日本語習得に関わる社会的変数の合計が第 1 位を占めている。学校教育を受けて来日し、日本語主流社会での生活が 23 年に及ぶ。つまり、ピジン化が想定できる要素が見当たらないのである。CH の場合は、ピジン化を経っていない段階で標準変異音の習得が完成した条件が満たされているためである。似たような解釈は BJ にも当てはまる。BJ は、韓国で中学を卒業し、日本でも 2 年間高校に通った経験をもつ。また、学習経験の期間が他の話者に比べ長く、ピジン化の条件と結びつかない。したがって、CH と BJ の接触変異音の使用は脱ピジン化の結果ではなく、移住した地域の言語つまり生野周辺の対象音韻の過小弁別に影響（同化）されたものであると考えた方が妥当であると思われる。両者とも現在の普段の接触相手が同母語話者中心であることから、それぞれ習得した標準変異音が接触変異音主

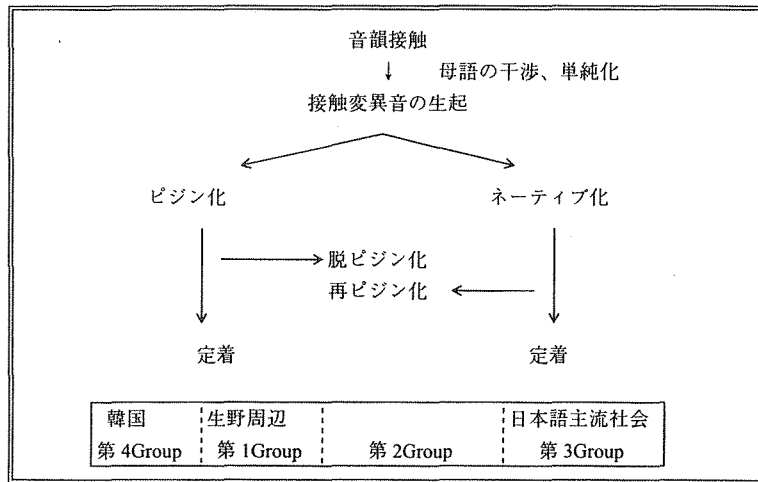
流のコミュニティへの移住によって接触変異音への切り替え（同化）が起こったと想定できるのである。出現した語彙が他の生野周辺1世の場合、生活上現れやすい語彙中心となっている反面、専門用語、抽象概念を表す漢語の使用率が高いことから両者の接触変異音の使用は他の1世とは異なる過程を経たものであることが容易に想定できる。CHとBJの例は、ネーティブ化が進んでいた段階で再びピジン化したものとして解釈できよう。CHとBJに比べ、JYは、学習をはじめた時期が両者と異なり、ピジン化が進んでから学校教育の中で標準変異音を習得したことになるため、この場合は脱ピジン化が進んでいるとみなしていいと思われる。完全に脱ピジン化が行なわれなかったのは普段の接触相手と同母語話者中心であることと居住する地域の影響であると考えられる。同様のことは、HI、SM、KT、TIについてもいえることである。個人の内部では脱ピジン化を促す社会的要素が作用していても、生野周辺というピジン化を促す強力なコミュニティの影響が完全な脱ピジン化への到達を妨げることになるのである。実際、生野周辺の在日コリアン1世のコミュニティでは第1グループのような属性を有する1世が多数者であり、第2グループのような属性を有する話者は少数者であることがこの説明を裏付けるものになる。ピジン化を促す強力なコミュニティの内部に入ると、個別的属性は有効に働かないといえる。

6. 変異音の定着過程

以上の内容から、両変異音の生起と定着は、話者の個別的属性によって生起し、話者の属するコミュニティの内容によって定着されることが整理できよう。これらの生起から定着までの過程とコミュニティの内容を図式化すると以下ようになる。

まず、もっとも接触変異音が安定しているのは、変異音の発生後、標準変異音との接触が断絶された韓国であり、次いで、ピジン化を促す閉鎖的なコミュニティを内在する生野周辺である。接触変異音の定着には、初期の定着者（使用者）に生起した干渉形態が同一社会の他の構成員への伝播し習慣化する段階をへて定着したことになる。定着にいたるまでの両コミュニティの類似点は、標準変異音との接触の欠如であり、相違点は、生野周辺の場合、韓国のように完全に標準変異音との接触が断絶したわけではないため、話者の心理的態度、志向によって脱ピジン化の可能性が潜在していることである。しかし、すでに、接触変異音がコミュニティ内部で定着しており、コミュニケーションに支障を及ぼすことなく通用しているため、脱ピジン化につながる心理的態度や志向がうまれる可能性はまれであるともいえる。この点、生野周辺はピジン化を促す、言い換えればネーティブ化

図2 両変異音の生起と定着のプロセス



を妨げる社会的条件が地域単位で形成された特殊な地域であるといえる。

一方、標準変異音の定着には、初期に生起した音素の干渉形態が、標準変異音を使用する社会の構成員の方へ伝播し定着した段階を経る。

7. おわりに

以上、生野周辺における音韻変異の使用実態について、話者の属性や社会的環境との相関に注目して考察を行なった。先行研究が皆無で、1世の音韻変異における体系的な不明、資料としての制約など綿密な分析を行なうには十分ではなく、方法論が確立していない段階で手探りの論証にとどまったことは否めない。しかし、本稿での考察は今まで不明とされていた在日コリアン1世の言語接触状況及び彼らが属する社会的環境を知る手がかりにはなったと思われる。今回は、属性と社会的背景など言語外的要因が主な考察の対象となったため言語内的要因が考察の範囲から外された。今後の課題にしたい。言語内的要因が分析できるような方法論とデータの取り方への工夫も課題として残されている。

【注】

- 1) 代表的な例として、真田の提唱するネオ方言があげられる。真田（1999）では、個人の標準語と方言の接触によって生起した新形式が地域社会のスピーチスタイルとなっていると指摘し、言語接触の観点を集団レベルでとらえている。
- 2) この場合、音素レベルの解釈が妥当であるが、日本語の音素／c[ts]／は、母音の[ɯ]とし

- か結合しないため、結果として音節単位の問題として実現する。
- 3) 韓国語の濃音 [s'] は、声門閉鎖の直後に摩擦が行われる音声であり、調音的に喉頭化音（放出音という見方もある）に分類されるものである。日本語では促音の閉鎖の後に表れる音声として /s/ の条件異音である。
 - 4) 韓国の借用語彙辞典『고치고 더한 쉬운 우리말』を調べると、日本語の [tsu] を含む語彙が 109 ある。このうち、108 は「쓰 [s'w]」によって表記され、残り 1 は「즈 [d3u]」によって表記されている。
 - 5) 1916 年生まれ、慶尚道出身女性。日本語の学習経験がない。被調査者が居住する地域はほとんど在日朝鮮人がおらず、日本人との接触が中心となっている。普段の生活言語は日本語である（孫 1998）。
 - 6) 生野周辺の在日コリアンの来日から定着までの歴史的、社会的背景については金（1998 a,b）を参照されたい。
 - 7) 自然談話という資料の制約上、言いよどみの中で発音されたもの、笑い、咳き込みなど非言語的要素によって発音が明瞭でない場合、語の出現が途中で放棄されているもの、前後の音声の結合が正しくないもの、その他、インフォーマントの生理的問題による不明な実現、筆者の耳では判断ができないものなどは対象から取り除いた。
 - 8) 本稿で用いる第 3 グループ（青森、姫路 1 世）の資料は、両方とも在日コリアンの言語を研究している前田理佳子（青森 1 世）、文春琴（姫路 1 世）両氏の厚意によって得られたものである。筆者は調査に加わっていない。インフォーマントの個人的情報は、両調査者からの情報と談話の内容から判断した。
 - 9) 梅田（1985）は、日本語を習得中の韓国語母語話者における日本語の [ts] 音の干渉形態として [s']、[tʃ] を取り上げている。しかし、具体的使用実態については触れていない。筆者の観察では、[s'] は、主に植民地支配当時に日本語を習得した老年層に使用され、[tʃ] は近來に日本語を学習している世代に使用されるといった世代差の可能性がみられる。特に英語など外国語教育や外来語の普及によって [ts] の音価を知覚している若年層にとって日本語の [ts] の習得はあまり問題とされない場合が多い。第 3 言語の音声習得における第 2 言語の影響は、土岐（2000）に指摘されている。

【参考文献】

- 梅田博之（1985）「朝鮮人に対する日本語教育と日本人に対する朝鮮語教育」『日本語教育』55
- 真田信治（1996）『地域語の生態シリーズ 関西篇 地域語のダイナミズム』おうふう
- 真田信治（1999）「ネオ方言の実態」『日本語学別冊 地域方言と社会方言』明治書院
- 真田信治他（1992）『社会言語学』おうふう
- 真田信治・姜錫祐（1996）「韓国で日本語と意識されている語彙について」『待兼山論叢』30
- 大阪大学文学会
- 孫佳織（1998）「在日朝鮮人の言語について－1 世の発話から見られる干渉と切り替え－」
- 1998 年度新潟大学人文学部卒業論文（未公開）
- 金美善（1997）「在日コリアンの言語行動－大阪市生野区に居住する 1 世の日本語運用の特徴－」
- 社会言語学研究会研究発表予稿集（於：大阪大学）

金美善 (1998a) 「大阪市生野周辺定住在日코리안 1世의日本語運用」『国際高麗学』4

国際高麗学会

金美善 (1998b) 「在日コリアン1世の日本語」『日本学報』17 大阪大学文学部日本学研究室

土岐哲 (2000) 「ミクロネシア・チュークの現日本語学習者による日本語音声」『阪大日本語研究』12 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座

文春琴 (1997) 「在日韓国・朝鮮人1世の言語運用の特徴―バイリンガリズムに見られる言語的特性を中心に―」『日本語教育論文集―小出詞子先生退職記念―』

前田理佳子 (1999) 「在日コリアン一世の談話におけるスタイル切り替え―スピーチレベルシフトの様式に着目して―」『待兼山論叢』33 大阪大学文学会

Klein, W. (1986) *Second Language Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.

Odlin, Terrence. (1989) *Language Transfer: Cross-Linguistic Influence in Language Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.

Schumann, J. (1978) *The Pidginization Process*. Rowley, Mass: Newbury House.

Selinker, L. (1972) Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics*, 10: 209-31.

Thomason, Sarah, and Terrence Kaufman. (1998) *Language Contact, Creolization and Genetic Linguistics*. Berkeley: University of California Press.

Weinreich, U. (1953) *Languages in Contact*. The Hague: Mouton

【参考資料】

元秀一『猪飼野物語―濟州島からきた女たち―』草風館

한글학회 (1984) 『고치고 더한 쉬운말 사전』

【謝辞】

本稿での論を進める段階で青森、姫路の1世の資料は生野周辺1世の音韻変異を浮き彫りにするための大変有益な資料となった。録音談話テープを貸して下さった前田理佳子、文春琴両氏の厚意に深く感謝申し上げます。

きむ みそん (博士後期課程学生)

付録 語彙別分布：生野周辺（延べ／異なり）

話者	語彙(42/21)	ts	s	話者	語彙	ts	s	話者	語彙	ts	s	話者	語彙	ts	s	話者	語彙	ts	s
HR	いんさつ	6	2	CH	たつ(立つ)	2		BJ	つける	2		SM	もつ	1		YS	けいさつ		2
HR	うつす		1	CH	ちよくせつ		1	BJ	つたえる	1			合計	36	35	YS	つき		3
HR	きたたつみ	1		CH	ついて	2		BJ	つつく	1	1	話者	語彙(37/13)	ts	s	YS	つきあい		1
HR	きつい	1		CH	つかう	1		BJ	つづける	1	1	TI	いつも	2		YS	つくる		19
HR	ごっつい	1		CH	つきあい	1		BJ	つつむ		2	TI	一がつ	3	5	YS	つけもの		1
HR	せいかつ	1	1	CH	つくる	8	5	BJ	つて	2		TI	ついたち	1		YS	つっかけ		1
HR	たつ(立つ)	1		CH	つける	1		BJ	つとめる	2		TI	つかう	2		YS	ふつう		2
HR	たまつき	1		CH	つしま	2	3	BJ	つぶす	1		TI	つかまる	1		YS	ぶつかる		1
HR	つかう	6		CH	つむ	1		BJ	つぶれる		2	TI	つき	1	3	YS	ほうりつ		1
HR	つきあい		1	CH	つるいち	1		BJ	つみ	1		TI	つく(着く)	1		YS	やつ		1
HR	つく(付く)	2		CH	つるはし	1		BJ	つむ	1		TI	つくる	2			合計		3
HR	つける	1		CH	つれる	7		BJ	つらい	1		TI	つぶす	1		話者	語彙(79/37)	ts	s
HR	つぶれる	1		CH	てつどう	1	3	BJ	つるはし	1		TI	つれる	6	3	SA	あつまる		1
HR	つぼ	1		CH	にしまつ	3		BJ	つれる	2		TI	ひつつく	3		SA	うつす		2
HR	つれる	2		CH	はつでんし	1		BJ	とういつ	8		TI	べつ	1		SA	うんどうぐつ		4
HR	なつかしい	1	1	CH	べつ	2		BJ	どくりつ	1		TI	やつ	1	1	SA	一がつ		1
HR	ひとつ	5		CH	みつつ	1		BJ	ななつ	1			合計	16	21	SA	きつい		1
HR	ふたつ	1		CH	やつ	1		BJ	はいたつ	3		話者	語彙(58/20)	ts	s	SA	くつ		1
HR	ふつう	2			合計	47	16	BJ	ひとつ	2	2	KT	あいさつ		2	SA	くつした		2
HR	みつつ	1		話者	語彙(111/5)	ts	s	BJ	べつ	1		KT	あつまる	1		SA	一がつ		5
HR	やつ	1		BJ	あいつ	1		BJ	やつ	3		KT	えんぴつ	1		SA	しょうがつ		1
	合計	36	6	BJ	あつまる	1		BJ	やみつ	1		KT	一がつ	8	7	SA	一ずつ		1
話者	語彙(38/19)	ts	s	BJ	いっさつ	1		BJ	よつつ	1		KT	一がつ	1		SA	せいかつ		1
JY	いっ	1		BJ	いっつ	1	1		合計	79	32	KT	しょうがつ	1		SA	せつび		1
JY	一がつ	3		BJ	うつ	1		話者	語彙(71/36)	ts	s	KT	一ずつ	1		SA	たつみ		1
JY	きつい	1		BJ	一がつ	2		SM	あいさつ	1	1	KT	せいかつ	1		SA	ちかてつ		1
JY	けいさつ	1		BJ	ぎじゅつ	3		SM	あつかう	1		KT	たつ(竜)	1		SA	つうじる		1
JY	一がつ		1	BJ	きつい	1		SM	あつめる	1		KT	たつ(立つ)	1		SA	つかう		8
JY	さつまいも	2		BJ	けいさつ		3	SM	いつ	1		KT	つかう	8		SA	つき		1
JY	しつもん	1		BJ	けいべつ	1	1	SM	一がつ	2		KT	つぎ	2		SA	つきあう		2
JY	せいかつ	1		BJ	こいつ	2		SM	くつ	1		KT	つきあい	1		SA	つくる		2
JY	たつ(経つ)		1	BJ	さべつ		4	SM	けいさつ	1		KT	つく	4		SA	つけもの		1
JY	つかまる	1		BJ	しつもん		1	SM	一がつ	4	4	KT	つくる	2		SA	つける		1
JY	一つき	1	1	BJ	しょうせつ		1	SM	つうじる	1	1	KT	つもり	1		SA	つつむ		2
JY	つく(着く)	2		BJ	しょうとつ	1		SM	つかう	3	8	KT	つらい	1		SA	つぶす		1
JY	つく(付く)	1		BJ	しりつ		2	SM	つかまる	1	6	KT	つれる	1	2	SA	つぶれる		2
JY	つくる	7	1	BJ	しんせつ	1		SM	つき(月)	3		KT	どうぶつ	1		SA	つぼ		4
JY	つける	2		BJ	せいかつ	3		SM	つく(着く)	1		KT	ひとつ	5		SA	つむ		1
JY	つづき	1		BJ	そつぎょう		2	SM	つく(付く)	2		KT	ふたつ	1		SA	つらい		2
JY	つれる	2		BJ	だんあつ	1		SM	つくえ	1		KT	ふつう	4		SA	つれる		3
JY	ばんつ		1	BJ	だんけつ	3	2	SM	つける	1			合計	16	42	SA	てつ		1
JY	やつ	4	2	BJ	つう	1		SM	つとめる	3		話者	語彙(64/21)	ts	s	SA	ながぐつ		4
	合計	31	7	BJ	つうこうにん	1		SM	つながる	1		YS	あいつ	1		SA	ねつ		1
話者	語彙(63/26)	ts	s	BJ	つかう	5	1	SM	つみ	1		YS	あつまる	3		SA	ひとつ		2
CH	いつも	1		BJ	つかまえる	1		SM	つむ	1	2	YS	いくつ	1		SA	ふつか		
CH	一がつ	2		BJ	つき	2	1	SM	つれる	4	2	YS	いつ	3		SA	ほんこつ		
CH	きょうしゅつ	1		BJ	つきあう	2		SM	てつだう	2		YS	いつも	1	1	SA	みつつ		1
CH	けいさつ	2	1	BJ	つく(付く)	5	2	SM	とつぜん	1		YS	一がつ	9		SA	もつ		1
CH	一がつ	2	1	BJ	つく(着く)	1		SM	なつく	1		YS	一がつ	3		SA	やつ		1
CH	けんせつ	2		BJ	つくす	2		SM	はつおん	2		YS	こいつ	2			合計		5
CH	じつ		2	BJ	つくづく	1		SM	ひとつ	1	2	YS	すぼ一つ	1					
CH	せいかつ	1		BJ	つくる	1		SM	ふつう	1	2	YS	つかう		7				

語彙別分布：他地域・韓国居住話者（延べ／異なり）

話者	語彙(39/33)	ts	s	話者	語彙(58/34)	ts	s	話者	語彙(27/11)	ts	s
姫路	あいっ	1		青森	あいさっ	1		P	がつ(九月)		4
姫路	あっこ	1		青森	いつ	2		P	しつもん	1	
姫路	いつも	1		青森	いつか(五日)	2		P	せいかっ		1
姫路	うつ	1		青森	いつも	1		P	せつやく		1
姫路	一がつ	3		青森	うつのみや	1		P	たつ(立つ)		1
姫路	けいさっ	1		青森	かつぐ	3		P	つかう		13
姫路	けつあつ		2	青森	きせつ	1		P	つくる		1
姫路	ごっつい	1		青森	きつい	1		P	つづく		1
姫路	しょうがつ	5		青森	けいさっ	3		P	ひとつ		1
姫路	一ざっ		1	青森	一げっ	1		P	べっ		1
姫路	つかまる	1		青森	しつれい	2		P	ゆうびんぶっ		2
姫路	一つき	1		青森	ずっ	1			合計	1	26
姫路	つける	1		青森	ついて	1		話者	語彙(8/6)	ts	s
姫路	つづける	1		青森	つかう	2		O	つかう		2
姫路	つっぱる	1		青森	つがる	5		O	きょうしつ		1
姫路	つぶす	2		青森	つき	1		O	ふたっ		1
姫路	つぶれる	1		青森	つくる	2		O	ばっ		1
姫路	つれる	2		青森	つける	1		O	せいけつ		1
姫路	ひつつく	1		青森	つごう	1		O	べっ		2
姫路	ひとつ	1		青森	つづける	1			合計	0	8
姫路	ふたっ	1		青森	つとめる	1					
姫路	ふつう	2		青森	つぼ(壺)	1					
姫路	べっ	1	3	青森	つぼ(埤)	2	*3				
姫路	へんくっ	1		青森	つま	1					
姫路	もっ	1		青森	つまらない	1					
姫路	やつ	1		青森	つる	1					
	合計	33	6	青森	つれる	1					
				青森	とくべっ	1					
				青森	なっ	1					
				青森	にもっ	1					
				青森	ひとつ	7					
				青森	ふたっ	1					
				青森	ほうりっ	1					
				青森	ぼつぼっ	2					
					合計	55					
					その他*	t	3				